

デューイの成長論とアクティブ・ラーニング

—衝動、試行錯誤、コミュニケーション—

行 安 茂

1 私のデューイ研究の始まりと南イリノイ大学での講義

私がJ. デューイ（1859–1952）の研究に着手したのは、昭和45（1970）年からであった。私が39歳のときである。大学院時代（1954–1961）はイギリスの理想主義者・T.H. グリーン（1836–1882）の「自我実現の研究」が私の研究テーマであった。この論文を博士論文として広島大学大学院に提出し（1963）、学位を受領したのは昭和40（1965）年2月23日であった。グリーンの自我実現は19世紀後半には自由主義の教育改革の理論として注目され、グリーン自身も「オックスフォード男子高等学校」の創設やサマーヴィル・カレッジ（オックスフォード）の創設に尽力した。しかし、19世紀後半にはG.E. ムアやB. ラッセルによってグリーンの理想主義が批判され、それに代わって実在論が台頭していた。私はグリーンの自我実現論はデューイのプラグマティズムと何らかの関係があるのではないかと考えていたところ、『初期デューイ全集』が発行されつつあることを日本倫理学会のある会員から聞き、その第一巻から第五巻までを購入した。その第三巻（1969）の「序論」（S.M. エイムズ教授の執筆）を読み、若きデューイ（32歳）がグリーンの理想主義の自我に強い関心をもっていることを知った。エイムズ教授はデューイの『批判的倫理学概要』（1891）を中心に評価する。彼は若きデューイがグリーン『倫理学序説』から影響されていることを指摘する。デューイは本書においてグリーンのカント批判および功利主義批判を紹介し、検討するが、そこにはグリーン『理想主義の自我実現』から、心理学的観点に立つ人間の成長過程への転換が見える。とくに初期の論文「道徳的理想としての自我実現」（1893）には、この傾向が強く示されており、デューイの方法がグリーン『形而上学的前提』から実験主義的方法による新しい自我の成長へ転換することが示唆されている。

まず、エイムズ教授（1916–1986）の業績について簡単に紹介しておきたい。彼の著書は次の五つである。

- ① The Philosophy of Alexander
- ② *Pragmatic Naturalism* (1977)
- ③ Poems of Love and Peace
- ④ Logical Methods

⑤ Lectures in the Far East

彼はこれらの他、『ジョン・デューイ初期著作集（1882-1898）』全五巻の共同編集者の一人でもあった。②の *Pragmatic Naturalism* は日本では峰島旭雄他三人の共訳『認識と価値の哲学』（大明堂、昭和58年）として発行され、私も書評をしたことがある。エイムズ教授は以上の他、『ジョン・デューイ中期著作集（1898-1924）』全五巻の顧問でもあった。私は教授とは15年間（1970-1985）交流してきた。その人柄について私は次のように述べたことがあるので紹介しておきたい。「一言でいえば彼はヒューマニストであったといえよう。これはセント・ルイス空港で初めてお目にかかって以来感じていたことである…。今回、彼の死去を報じた現地新聞の『南イリノイ』（1986年9月20日）には『彼はキリスト教会（キリストの弟子）の牧師として働いていた』と紹介されているのを読んで、私は彼が「牧師」でもあったことを初めて知った。だからこそ『愛と平和の詩』という著書も書けたのだろう。そして彼の人柄がヒューマニズムに富んだことの源泉を初めて知ることができた。……エイムズ教授退職記念事業の一環として企画された『書簡集』（彼の内外の知人から寄せられた思い出の手紙）の編集者・ハウィ教授（南イリノイ大学）は筆者への原稿依頼の手紙（1985年2月28日）の中でエイムズ教授の功績にふれ、彼は『アメリカ哲学会の2ヶ年間の哲学委員会のプログラム委員長、哲学教育の開発作戦隊委員長、マッチティ基金コンサルタント、全国人文学基金案の評定者として全国的に活躍した。』』という。¹

さて私は1973年4月23日（月）に2時間、南イリノイ大学哲学科において、「グリーンとデューイ」と題する講義をした。受講者は大学院の院生・学生等20名以上、教授、助教授、大学の職員等6名であった。オックスフォードの出発（1973年4月15日）以前、私は同年2月3日から講義案を毎日考えた。ブラックウェル書店に行ってデューイ関係の本を調べていたところ、『哲学の改造』があったのでこれを購入し、これを読んで講義案の内容を考えた。さらに、オックスフォードのボードリ図書館に行き、初期デューイのグリーン批判についての三論文²を借り出し、これらを読んだ。これによって私は初期デューイの思想形成においてグリーンの自我実現の理想が大きなインパクトを与えていることを初めて知ることができた。グリーンはデューイへの影響についてはデューイ自身もこれを認めているが³、日本においてはこの影響についてはほとんどといってよいほど知られていない。この点から私は南イリノイ大学において「グリーンとデューイ」について講義する意義があると考えた。

¹ 行安茂『デューイ倫理学の形成と展開』（以文社、1988年、276-277頁）

² デューイの三論文とは「トマス・ヒル・グリーンの哲学」（1889）、「グリーンの道徳的動機論」（1892）、「道徳的理想としての自我実現」（1893）である。詳細は拙著『デューイ倫理学の形成と展開』（284頁）を参照。

³ J.Dewey, "From Absolutism to Experimentalism", in *LW*, Vol.5, pp.147-160.

2 『哲学の改造』と成長の再評価

私は以上のような経緯から初期デューイのグリーン批判の三論文の中でとくに重要な論文「道徳的理想としての自我実現」と中期デューイの著作『哲学の改造』（1920）とを中心として検討し、デューイの実験主義的な経験の過程を検討した。帰国後、私は経験の過程が成長の連続的過程であることを発見し、初期デューイが注目した「衝動の調停」と、『哲学の改造』において主張される「成長それ自身が唯一の道徳的目的である」という命題とがどのように関連しているかを検討する仕事に着手した。デューイはこの命題をなぜ主張したのだろうか。

この問題を解決するためにはデューイがグリーン理想主義の道徳的理想をなぜ批判したかを理解する必要がある。デューイのグリーン批判の要点は以下の点にある。グリーン理想主義の道徳的理想の自我実現においては実現すべき理想と現在の自我の活動とが二元的に対立し、両者が分裂し、ギャップがある。グリーンの自我実現は自我の目的を実現する活動の中に自我の満足を見出すという理論である。しかし、グリーンの道徳的理想は究極的には人間の完成（human perfection）であり、現実の自我の目的から遠く離れた目的である。現実の自我実現は道徳的理想に到達していないから、完全には実現されない。この矛盾をどう解決するかということがデューイの根本問題であった。

デューイは人間は不完全であるから失敗しやすく、誤りやすいという。デューイはこの現実を直視し、失敗の誤りや意味を前向きに解釈し、次の成功を導く指示として解釈する。それらは絶対的な悪ではなくして次の新しい行動の方向転換のスタートとして見る。デューイはこれを「旋回心軸」（pivot）と呼んだ。デューイは次のようにいう。

「誤りはもはや単なる悲しまれるべき不可避の出来事でもなければ、償われ、許されるべき道徳的罪でもない。誤りは未来におけるよりよい進路について知性や教養を間違えて用いる方法の教訓である。それらは修正、発展、再調整の必要を指示するものである。諸目的は成長し、判断の標準は改善される。人間は、彼がすでに所有している、最も進歩した標準や理想を良心的に使用する義務と同じくこれらを発展させる義務の下にある。道徳的生活は形式主義と固定した繰り返しに陥ることから保護される。」⁴

われわれは一度の誤りや失敗を取り返しのつかない出来事として固定的に考えやすい。さらにそれに執着し、いつまでも悔やみやすい傾向がある。デューイは未来を考える。過去の失敗にとらわれるのではなくて、それを反省し、どこに間違いがあったかを再点検することによって、次に何をなすべきであるかを未来に向かって考える。このように考えることによって再出発の第一歩を考える。ここに人間の成長があるとデューイは考える。過去の失敗の行為は未来に向かって第一歩を踏み出す転換点である。悪い結果は善い行動への刺激である。デューイはこのような考え、善い人間と悪い人間との区別について次のように述べる。

「悪い人間とは、彼が今までいかに善かったとしても、今悪くなり、より善くならなくなり始

⁴ J.Dewey, *Reconstruction in Philosophy*, in *MW*, Vol.12, p.180.

めている人である。善い人間とは、彼が今までいかに道徳的に無価値であったとしても、今より善くなろうと動いている人である。こうした考えは自分自身を判断するとき人を厳しくし、他人を判断するとき思いやりのあるようにする。それは固定した諸目的への接近の程度に基づく判断に常に伴う、あの傲慢を排除する。」⁵

デューイにとって大切なことは「今」どの方向に向かって行動しているかということである。「今」とは現在の行動である。その行動がより善くなりつつあるかどうかということである。問題は「より善くなりつつある」とは何を以ていえるかということである。これは目的と手段との関係をどう考えるかということである。デューイのいう目的は現在の活動である。そしてこの活動に注意が集中し、自我と活動とが同一化されている状態が現在の活動である。デューイはこの活動を目的と手段との連続的過程であると呼ぶ。彼はこのように考えることによってグリーンの二元論が克服されると考える。デューイが道徳的行為は「固定した諸目的への接近」ではないと考えるのは、この接近行動には注意、行動、自我の統一が忘れられているからである。

3 習慣の形成と目的・手段の関係

デューイは「人間は習慣の被造物である。」という。習慣は行為の仕方であり、それは人間が直面する状況によって多様である。習慣はデューイによれば、状況に適応する行動様式であり、過去においては効果的であったが、新しい状況においては役に立たない場合がある。過去の習慣は新しい状況の目的達成のため修正されなければならない。デューイは習慣を目的達成の手段と考えるが、その手段は状況の変化によって新しく修正され、新しく組織化されなければならない。この手段は実現された目的の中に発見されなければならないとデューイはいう。彼は目的と手段とは連続的關係において考えられなければならないという。彼は船員の例を挙げ、以下のようにいう。

「船員は星に向かって進むのではなくて、星に注目することによって航海という現在の活動を行うことを助けられる。港は船員の目標であるが、これは港に到着することの意味においてのみであり、それを所有することの意味においてではない。港は船員の活動が再方向を必要とする意味のある点として彼の思考の中にある。活動はその港に到着したとき終わるのではなくて、単に活動の現在の方向付けであるにすぎない。港は現在の活動の終わりであると同じく真に活動のもう一つのあり方の始まりである。」⁶

われわれはある目的が実現されたとき、これに満足してしまい、それが次になすべき行動の始まりであることを忘れる。そしてわれわれは充実感を失い、毎日の生活に一抹の不安と虚しさを覚える。なぜであろうか。それは、デューイによれば、達成された目的が次になすべき行動の手段として連続的に結合していないからである。目的への到達は次の行動のスタートであることが忘れられているからである。活動の連続的過程の中に意味があるとデューイは考えるのである。

⁵ *Ibid.*, pp.180-181.

⁶ J.Dewey, *Human Nature and Conduct*, in *MW*, Vol.14, p.156.

デューイは「健康」を例にあげ、以上のプロセスを説明する。「健康は一度だけ固定された目的ではなくて、健康において必要とされる改善—絶え間のない過程—が目的であり、善である。」⁷ われわれは生活習慣が健康に必要であることをよく聞く。生活の中で健康のためにリハビリテーションや散歩が必要であるといわれる。これを知らない人はいないはずである。しかし、毎日の生活においてこれらの運動が連続的になされているであろうか。こうした連続の継続を可能にするものは何であろうか。デューイはこれを衝動と思考の連動であるという。衝動は元気回復（refreshment）と再生（renewal）との原動力である。これらが具体的に引き出されるのは思考によってである。デューイは習慣、衝動、思考の三者の関係について次のように述べる。

「衝動は思考を目覚まし、反省を起こし、信念を活気づける。しかし、反省のみが障害物に注意し、手段を思考し、目標を考え、技術を方向づけ、かくして衝動を対象の中に生きている芸術へと変える。思考は妨げられた習慣のあらゆる瞬間における衝動の双生児である。しかし、思考が育てられなければ、それらはすばやく衰え、習慣と本能とが内乱を続ける。」⁸

デューイは習慣の原動力は衝動であるという。しかし、習慣は反省がなければ本能との「内乱」状態に陥る。そうならないために衝動を方向づける役割を果たすのが反省である。このようにして形成された習慣は固定化される。しかし、新しい状況に直面したとき今までの習慣は適用されない場合がある。この壁を打破する力が反省（思考）作用であるとデューイはいう。かくして新しい習慣の形成が求められる。これは過去の習慣を修正し、新しい目的実現のための手段の発見である。過去の習慣は全面的に否定されるものではなく、その部分を修正することによって新しい目的の実現へと転換する「旋回心軸」としての役割を果たす。これは衝動の組織化と呼ばれる。この意味において習慣は経験の絶えざる連続的プロセスである。

デューイのこの習慣形成論には三つの重要な点が含まれている。第一点は習慣は目的を達成するための単なる手段ではなくて、目的と手段とは同じ活動の二側面として考えられることである。一見して目的を実現することとそれへの手段とは別々の価値として考えられやすいが、現在における活動は本質的には同一であるとデューイはいう。第二は目的は現在の活動を方向づける観念であり、これを具体化する行為が手段であるということである。これら二つは活動の二側面であり、本来同一事実である。第三はこの活動は行為と注意とが同一化された活動であるということである。換言すれば注意が行為に集中していることである。従って自我と注意とは行為において統一され、しかもこの統一は時間の変化の中にあって維持される。問題は注意のみによってこの統一が可能であるかということである。改めてデューイの「人間精神」（the human spirit）と注意の働きとの関係を再考する必要がある。

⁷ J.Dewey, *Reconstruction in Philosophy*, p.181.

⁸ J.Dewey, *Human Nature and Conduct*, p.118.

4 コミュニケーションと自他の成長

デューイは『民主主義と教育』(1916)の中でコミュニケーションについて以下のように述べる。「通信とは経験が皆の共有の所有物になるまで経験を分かちあって行く過程である。通信はその過程に参加する双方の当事者の性向を修正する。」⁹さらに、デューイは「健全な通信とは、共同の関心があり、共通の関心があるので、一方は熱心に伝えたがっており、他方は受けたがっている通信である。」¹⁰という。

デューイが当時このようにいうのはアメリカの社会が科学技術の発展によって産業構造が変化し、人々は都市へ流出し、市民の人間関係が希薄となっていたからであった。そのため「共通の関心」をいかにして回復するかということが問題であった。これは政治の問題であると共に教育の問題でもあった。デューイが『公衆とその諸問題』(1927)を書いたのはそのためであった。彼はこの中で市民の声を紹介している。「わたしが投票しようとするまいと同じことではないか。どうせ同じ道を歩む。私の投票は決して何も変えなかった。」¹¹

政治に期待しない傾向があったと見える。政治への積極的関心を高めるにはどうしたらよいか。「共通の関心」をいかにして高めることができるか。とくに教育においてはそれはどのようにして可能であるか。改めて再検討すべき価値があるのはデューイが『民主主義と教育』の中で述べている次の一文である。

「社会生活が^{コミュニケーション}通信と同じことを意味するばかりでなく、あらゆる通信（したがって、あらゆる真正の社会生活）は教育的である。通信を受けることは、拡大され変化させられた経験を得ることである。人は他人が考えたり感じたりしたことを共に考えたり感じたりする。そしてその限りにおいて、多かれ少なかれ、その人自身の態度は修正される。そして通信を送る側の人もまたもとのままではいはいしない。ある経験を他人と十分にそして正確に伝えるという実験をしてみると、とりわけその経験がいくぶん複雑な場合には、自分の経験に対する自分自身の態度が変化しているのに気づくだろう。さもないと無意味な言葉を使ったり叫び声をあげたりすることになる。経験を伝えるためにはそれは系統だててきちんと述べられなければならない。経験をきちんと述べるには、その経験の外に出、他人がそれを見るようにその経験を見、その経験が他人の生活とどんな点で接触するかを考察して、他人がその経験の意味を感得できるような形にしておくことが必要である。」¹²

ここには重要な点が三点述べられている。第一は、コミュニケーションを送る人と受ける人との相互理解によって両者とも態度が変容するということである。デューイはコミュニケーションを受ける側から考え、自分の態度が以前のそれと比べて修正されているという。この場合、自分がコミュニケーションを送る人を誤解していたことがあったかもしれない。あるいはこの場合の

⁹ J. デューイ (松野安男訳) 『民主主義と教育』(上) 岩波文庫, 24 頁。本論文では筆者は訳者の引用文以外のところでは「通信」の代わりに「コミュニケーション」の語を用いた。

¹⁰ J. デューイ (松野安男訳) 『民主主義と教育』(下) 岩波文庫, 41 頁。

¹¹ 行安茂「プラグマティズムと公共性の哲学」, 日本デューイ学会『紀要』第 47 号 (2006), 196 頁。

¹² J. デューイ (松野安男訳) 『民主主義と教育』(上) 岩波文庫, 17-18 頁。

コミュニケーションが簡単な挨拶であるかもしれない。私は散歩のとき名前を知らない人と夕方笑顔で挨拶をし、野菜の作り方について尋ねたにすぎなかったが、昨年も今年も美味しいスイカをもらった。その人が何か感ずることがあったのかもしれない。第二点はコミュニケーションによって相手の態度も変わるということである。コミュニケーションは簡単な声かけから始まる。校長が校門のところに立って登校する児童生徒に声をかけることは大変意味がある。問題は部活動の指導者やクラス担任が、暴力やいじめから自殺する子供の場合、子供たちに信頼される教師であったかどうかということである。いかに校務が忙しかったとしても子どもたちをケアする心のゆとりがあったかどうかである。第三点は自分の経験や考えを系統的にきちんと述べることである。とくに、教師は管理職にある人に対してだけでなく、保護者に対しても第三者的観点から自分の経験をきちんと説明することである。教師の中には説明したり、文章を書くとき、論理的表現の乏しい教師がいる。デューイはこの点に注意を喚起したと考えられる。

デューイはコミュニケーションの源泉を「人間精神」(the human spirit)の「それ自身の内の静けさと秩序」に求める。¹³ デューイはコミュニケーションをこの観点から次のように述べる。

「人間心理学に何か期待されるものがあるとするならば、以下のように主張されよう。永遠的満足をもたなく生み出さない遠くのものへの休みなき追求に飽き飽きするとき、人間の精神(the human spirit)はそれ自身の内の静けさと秩序の追求に帰るであろう。われわれは繰り返しているが、これは直接的コミュニティの中にのみある、生き生きとした着実な深い関係においてのみ見出されるであろう。」¹⁴

デューイは「人間精神」を「静けさと秩序」の源泉であるというが、それは宗教的に考えられた深い世界であると考えられる。デューイはこれを芸術の源泉として考え、その経験を『公衆とその諸問題』の中で次のように述べる。

「意見や判断についての人々の意識的生活はしばしば表面的な、希薄なレベルで進む。しかし、彼らの生活はもっと深いレベルに達する。芸術の機能は習慣化された、決まりきった意識の外殻を打ち破ることであった。共通の事柄、たとえば一輪の花、月光の一条の輝き、一羽の鳥のさえずりは、それらによって生命のより深いレベルに触れ、その結果、それらが欲求や思想としてほとぼしり出る手段である。このプロセスが芸術である。」¹⁵

コミュニケーションはデューイにおいては芸術的宗教的世界にその源泉を発していることに注目する必要がある。

¹³ J.Dewey, *The Public and Its Problems*, in *LW*, Vol.2, p.369.

¹⁴ *Ibid.* p.369.

¹⁵ *Ibid.* p.349.

5 アクティブ・ラーニングと試行錯誤

現代の日本の教育界においては「アクティブ・ラーニング」が注目されているが、その源流がデューイの「試行錯誤法」にあることは容易に推察される。この関連についての研究は管見の限りまだ見たことはない。デューイの視点から改めてその接点を考え、日本におけるアクティブ・ラーニングとデューイの「なすことによって学ぶ」(learning by doing) 方法との共通点と相違点を考えることは、日本におけるアクティブ・ラーニングを前進させる上において極めて示唆に富むものがあると考えられる。デューイが「なすことによって学ぶ」というとき、「なすこと」は目的の達成(成功)のみを伴うのではなくて、失敗(誤り)をも伴うことはすでに第二節において考察されたとおりである。とくに、それが「誤り」を伴う場合、次の学習や行動を考えるとき、その失敗についての反省は次の新しい学習や行動を成功させる教訓であるとデューイはいう。日本においては学習上の誤りの積極的意味は評価されているであろうか。もし誤りや失敗が次の学習や行動への指示を与えるものとして注目されていないとするならば、「試行錯誤法」は再検討の価値がある。デューイはこの方法について次のように述べる。

「われわれの経験はすべて、『うまくいくまであれこれをやってみる』—心理学者が試行錯誤法と呼ぶもの—という一面を含んでいる。ただ何かをして、それに失敗すると、また別のことをする、そして、何かうまくゆくものに行き当たるまで試行を続ける、そして、そのうまくゆく方法をその後の行動でだざっばな経験的方法として採用するのである。」¹⁶

この方法の原点は衝動にあるとデューイはいう。衝動は一見して盲目的行動と結びつくように見えるが、それは経験を呼び出し、この経験によって衝動の方向や目的を確かめるとデューイはいう。衝動の中にはすでに知的作用が含まれる。これは人間の気が付かない点であるが、デューイは衝動、意志、思考は相互に作用し合うと考える。デューイが「衝動の調停」と呼ぶのは、以上の三者が人間性において必然的に結びついているからである。この意味において衝動は合理的である。デューイはこの点を次のように述べる。

「あらゆる衝動の表現は他の諸経験を刺激し、もとの衝動に反応し、これを修正する。この引き出された経験を引き出す衝動へ反作用することは道徳的行為の心理学的基礎である。」¹⁷

衝動が問題状況(危機)に直面するとき、これを克服する新しい経験を呼び起こすことによってもとの衝動は方向を転換する。この修正は瞬間的であるけれども、合理的修正である。私はこれに関係した、次の経験をしたことがある。

私は、小学校四年生の下校のとき、増水した川で水泳を試みて、溺れかけたことがあった。岡山県御津郡津賀村(現吉備中央町)の加茂川の堰止めの川は増水のためその中央部分は少し深いように見えた。友だち数人は浅瀬で遊んでいたが、私は一人で川の深い中央部分へ泳いだ。足が川底に届くかどうかを確かめたところ、足は届かなかった。二メートルの深さであり、呼吸も少し苦しくなり、溺れるかもしれないと感じた。その瞬間、私はクロールから背泳に切り換えた。

¹⁶ J. デューイ (松野安男訳) 『民主主義と教育』(上) 230-231 頁。

¹⁷ J. Dewey, *The Study of Ethics*, in *EW*, Vol.4, pp.236-237.

そして下流に少し流されるように背泳を楽にすることができた。暫くして手を川底に伸ばしたとき、浅瀬に手が届いた。「助かった」と思った。クロールから背泳への転換は瞬間的判断であった。それは直感であった。これは生きようとする強い衝動から起こった身体の瞬間的反応であった。冷静に考えると、それは「衝動の調停」という自然の合理的反応であったかもしれない。デューイは衝動の転換を「全自我」の表現の出口としてとらえ、次のようにいう。

「衝動のあらゆる調停の最初の効果はその衝動をチェックしたり引き止めたりすることである。反省は延期を意味する。それは行動の延期である。この延期を通して衝動は他の衝動、習慣、経験との結合へ持ち込まれる。今や、正常なバランスが保たれるならば、結果はもとの衝動が自我と調和し、それが表現されたとき、それはそれ自身の部分的本性だけではなく、全自我の本性を実現する。それは全自我が出口を見いだす機関となる。」¹⁸

デューイの「試行錯誤法」の原点は人間性の衝動にあるが、この衝動はアクティブ・ラーニングとして現れる。それは全自我を実現しようとする要求から古い習慣を修正し、新しい行動へと方向転換をする。

6 結び—デューイの成長論から学ぶもの—

以上、私はデューイの成長論を四つの視点（誤りと失敗、衝動と習慣、コミュニケーションと自他の成長、アクティブ・ラーニングと試行錯誤）から考察してきた。これらの積極的活動の源泉は衝動である。衝動は盲目的ではなく習慣形成の原動力である。この力は幼児期から現れ、15歳前後に発揮される。この時期は人生の転換期の最初の始まりである。以下、デューイの成長論の要点を総括し、その今日的意義を考えてみたい。

デューイは人間の成長を未来における理想像として考えるのではなく、現在における、絶えざる活動と考える。この活動は人間の生きようとする衝動である。衝動は何かをなそうとする活動の意志である。この「何か」とは人間がその置かれた特殊的状況において目指す目的である。それは人間が成長過程において実現しようとする目的である。この目的を実現する手段は活動であるが、デューイの成長論においては目的と手段とは現在の活動の二側面である。

この活動は人間の成長の各段階においては目的それ自身であると共に手段でもある。一つ一つの行動は目的を達成する手段であると共にそれ自身目的でもある。目的が達成されたとき、この目的は次の新しい目的を実現する手段として位置付けられる。この場合、手段としての行動は目的への単なる、外面的な手段ではなく、それ自身自我と同一化された目的である。デューイが自我と行動とを同一視するのは行動が注意を完全に吸収すると考えられているからである。これが成長の絶えざるプロセスである。

この成長過程は誤りや失敗を含む。この場合、成長は一面から見れば、停滞しやすい。これは退歩と結びつく。デューイはこの事実を認めた上でそれらの意味を検討する。誤りや失敗は次に

¹⁸ *Ibid.* pp.249-245.

なすべき行動への示唆でないならば、次になすべき行動の方向を発見することはできない。誤りや失敗が未来の成長への転換として評価されないならば、それらは生きた教訓とならないからである。それらが反省されないならば、成長とは逆の方向、すなわち退歩の生き方が始まる。デューイによれば「悪い人間」は成功の経験を前向きに生かさない人間である。「善い人間」とは過去の失敗を前向きに生かす人間である。要するに、成功であれ、失敗であれ、過去の経験を成長の連続的過程において考えるかどうかによって成長は左右されるとデューイは考える。

この場合、最も大切なことは今まで忘れてしまっているかもしれない過去の小さな成功経験を思い出し、これを現在の状況下での衝動と結合することによって新しい行動へチャレンジすることである。これが成長の第一歩である。私は旧制中学校三年生(昭和21年7月)の日曜日の夕方、アメリカの進駐軍を一人で救助したことがあった。当時、進駐軍は日本占領に伴う治安のため全国の都道府県にキャンプを張り、治安のパトロールをしていた。その本部は東京のGHQ(連合国総司令部)にあった。岡山県に派遣されていた進駐軍夫妻が日曜日に岡山県北へドライブに行った帰途、ジープの運転ミスにより、岡山県御津郡津賀村下加茂(現吉備中央町)の宇甘溪(紅葉の名所)の橋の下草むらに落ち、私は茫然として立っている軍人夫妻(30歳ぐらい)を見た。「アメリカの進駐軍だ、怖い」と思って猛スピードで走り去った。谷川に沿う県道を約500メートル走ったが、「アメリカ軍夫妻」を助けようと急に思い付き、Uターンした。二人が立っているところへ接近してみると、ジープが横転していた。私は「トラックが通るので、私はストップさせ、あなたがたを助けます」といった。やがて定期便のトラックが岡山から帰ってきたのでストップさせ、事情を話したところ「ジープを引き上げることは簡単だ」とドライバーはいう。ドライバーと助手はトラックから太いロープを取り出し、ジープの先端部分とトラックの後部とを結びつけた。ドライバーの運転操作に合わせ、後から押したところ、ジープをスルスルと県道に引き上げることに成功した。アメリカ軍人夫妻は大変よろこんだ。私はトラックの運転手と助手にお礼をいった後、進駐軍夫妻に「私と自転車と荷物(米30キログラムと野菜)をジープに乗せて下さいませんか、行き先は16キロメートル先の金川町です」といったら「OK」の返事であった。

私は戦時中「鬼畜米兵」の教育を徹底的に受け、アメリカ兵は恐ろしいと思っていた。初めて進駐軍と英会話し、ジープの運転席に座り、夫妻と話すことができた。英会話の教育を受けていなかったが、意思は互に通ずることができた。15歳のこの体験はその後の人生に大きな自信を与えた。

この体験は5年後の岡山大学在学時代、ミシガン大学日本研究所岡山ブランチ(岡山市南方)に派遣されていたメンデル研究員の社会調査の研究を援助するグループ活動に役立った。さらに、1972年5月以後オックスフォード大学への留学から1973年4月の南イリノイ大学での講義に至るまでの文通や論文(英語)を書く原点になるとは当時想像もしなかった。少年期の経験がその後の人間の成長にいかに関与しているかを改めて知ることができた。